

第四四四回 青葉会 令和五年四月二十七日(木) 於…三軒茶屋世田谷区施設

選者 川口孤舟

出席者 柿崎忠彦 川口孤舟 久米五郎太 後藤とみ子 在間千恵 佐藤忠重

豊田穰 西澤國護 長谷見敏(びん) 星田啓子

投句・選句 伊賀山そらお 熊谷國男(作者表記「く」) 小早健介 朱牟田静雄(恵洲)

高橋康敏 土谷堂哉 中川雅夫 古川百合子 福島正明 古田昇 宮内規雄

山崎亜也 山田啓子(けい子) 山内天牛 渡邊盛雄

選句のみ 今井紀久男 梅崎哲雄(作者表記「くす」) 重枝孝岳 庄司龍平 高橋清子

橋口隆 早川允章 山本三恵

【互選句】○は選者の特選 ◎は孤舟選者の選

十二点 若鮎に未知の堰あり瀬音あり 孤舟 (○そ・○くす・と・○健・孝・恵・康・○堂・○允・百・昇・け)

十点 ◎駅員の切符切る音昭和の日 とみ子 (忠・孤・く・孝・恵・正・昇・規・亜・天)

七点 隣国の近さ知りたる黄砂かな 千恵 (そ・忠・と・健・康・び・け)

からみ合う葉を剥がさんと春キャベツ 全 (五・た・堂・雅・び・啓・盛)

鎌倉寿福寺にて

◎囀りや実朝のゐて虚子のゐて 康敏 (くす・孤・ゆ・び・昇・百・け)

◎残雪や靴紐しかと八ヶ岳 びん (そ・孤・健・く・堂・國・天)

六点 桜守いとしむやうに幹に手を とみ子 (紀・孝・龍・允・規・○盛)

風光る白き産着の 一列に 全 (○紀・そ・くす・く・國・啓)

ジョーカーは手のうちにある春の雷 康敏 (五・と・恵・清・啓・亜)

見晴るかす花曼茶羅や吉野山 昇 (そ・健・千・清・け・盛)

五点 ◎群青の渦になだるる花吹雪 くに お (紀・孤・五・恵・康)

リハビリは玻璃越しの花眺めつつ 千恵 (紀・忠・正・規・盛)

◎春の雷何処かでテロの匂ひして 正明 (忠・孤・啓・允・亜)

◎藤垂れて万葉匂ふ奈良に入る 盛雄 (孤・千・龍・び・昇)

四点 制服をすこし着崩し入学す 孤舟 (忠・恵・○正・三)

間違電話あとの無聊や暮るる春 恵洲 (そ・五・堂・啓)

三代でトランプ遊び春夕べ ゆたか (五・と・千・隆)

春めくと思うこころの軽さあり 國護 (紀・くす・孝・亜)

夜桜や炎と見たり吾妻橋 啓子 (五・龍・允・三)

棄て置きし球根芽吹く命あり 全 (千・堂・ゆ・び)

八十の見果てぬ夢や春惜しむ けい子 (と・た・孝・堂)

…白鷺の最後のランチャの男を見た友から感激のメール

鮎子の釘煮小ぶりの荷で届く 天牛 (紀・健・ゆ・盛)

三点

◎風光る大棧橋にクルーズ船

そらお

(孤・清・康)

◎先生と別れの季節桜散る

忠彦

(孤・た・隆)

ここに俳句作らす四月馬鹿

全

(健・龍・〇三)

満天の星捲き込んで雪解川

孤舟

(ゆ・昇・三)

隠沼に魍魎魍魎の蝌蚪の紐

全

(〇昇・け・盛)

藤の花棚に咲き満つ女学院

五郎太

(紀・恵・國)

広島

楠若葉壊れし姿変えぬまま

全

(紀・ゆ・隆)

惜春や徒然草のさわり読む

健介

(千・清・び)

散りゆくを少しく待てと春の雨

千恵

(清・雅・百)

春眠や身の隈ぐまに睡魔棲む

百合子

(紀・磨・三)

春愁ひ想ひたゆたふ濃く淡く

啓子

(清・規・百)

二点

賑わいの戻りし春の中華街

そらお

(正・天)

髪型はいづれも螺旋つくづくし

孤舟

(く・〇康)

葉桜の陸軍墓地に香のぼる

五郎太

(隆・〇百)

絶景や三門楼上春惜しむ

健介

(た・允)

醍醐寺の栄華を偲ぶ花見かな

ただしげ

(國・允)

花散るや邂逅離別今年また

恵洲

(くす・孝)

指先で廻すピザ生地花の昼

康敏

(正・天)

春場所や四股八年の初賜杯

堂哉

(くす・く)

散歩する子犬も花を仰ぎ見る

ゆたか

(雅・隆)

春雨も寒きを思う老いさびし

雅夫

(た・規)

◎摘む毎に思い出浮かぶクロローバー

國護

(孤・雅)

奥山に住みなす村の遅桜

びん

(た・亜)

春眠や問題点は先送り

正明

(〇忠・龍)

まな裏に落花を浴びる母の顔

百合子

(紀・三)

花の下廃墟に蠢くウラニウム

啓子

(紀・正)

仰ぐほど高き涅槃図猫も居り

亜也

(康・け)

◎老いらくの遍路を誘ふ道後の湯

盛雄

(孤・ゆ)

飛花落花青葉会との点と線

全

(〇龍・亜)

一点

小さきけど花萼群れて美しき

忠彦

(天)

花水木静かに咲いて輝けり

全

(國)

春の日を舞ひ納めし神の島

五郎太

(百)

春の雷負けじと強き拍子踏む

全

(紀)

薫風や癖ある雨戸そろと開け

とみ子

(紀)

春埃ピアノ拭きあげ十八番(おはこ)弾く

全

(紀)

門柱は八重やまぶきに占拠され

千恵

(と)

朝早く木々で鳴く声百千鳥

ただしげ

(雅)

佐保姫の流す涙か今朝の雨

全

(紀)

鶯の鳴く音目覚まし時計かな

ゆたか

(千)

馬酔木花過ぐ世を告ぐや雨激し 雅夫 (紀)  
 桜散り川のせせらぎ温みあり 國護 (雅)  
 ゴザ敷いて急遽一席花見酒 全 (天)  
 春昼や順な仔犬の撮影会 びん (紀)  
 お堀にはタワーの影や花筏 全 (く)  
 離(さか)りゆく軍艦島や春の雲 全 (紀)  
 ラベンダー日を追ふほどに濃紫 啓子 (規)  
 花は葉に二羽の山鳩森閑と 規雄 (紀)  
 葉桜や二羽の山鳩寄り沿いて 全 (國)  
 山路きてたまさか目に入る藤の贅 亜也 (紀)  
 人あふれ都踊りの祇園かな けい子 (隆)  
 日曜日飯台かこむ手巻き寿し 天牛 (紀)



【句評】 一段下げて※の付してあるものは、採っていないが気になる点への留意点等コメントです。

十二点句 若鮎に未知の堰あり瀬音あり 孤舟

健介さん・・・新しき道を歩む若人らの前途の厳しさと希望とを見事に示唆。

孝岳さん・・・若者たちは、待ち受ける幾多の困難も克服できる。その洋々たる前途を祝福するような秀句です。「未知の」が効いていると思います。

恵洲さん・・・若鮎の立場になつての作句が面白い。瀬を遡る鮎の澁刺たる姿が見えます。康敏さん・・・海から川を遡上する若鮎は、様々な難関を越えねばならない。成魚となり解禁になると釣針が出現する。

堂哉さん・・・若鮎の懸命な姿が目につかびます。日本の若者もどんどん挑戦して欲しい。允章さん・・・急流の堰を水しぶきをあげて遡る若鮎の姿が見える。

十点句 駅員の切符切る音昭和の日 とみ子

孤舟さん・・・単線鉄道での交換用タブレットと、しきりに鈿を鳴らし硬券を切る駅員を、今では見掛けなくなつた。

國男さん・・・4月29日の祝日。ローカル線の駅だろうか。改札口で切符を切る音を聞いて「まさか」という作者の驚き。同時に、「昭和は遠くなつたなあ」という作者の思いが込められているようにも感じる。

恵洲さん・・・今は昔の、駅員の巧みなハサミ捌きの音。確かに昭和の音という感じがする。天牛さん・・・だんだんこんな雰囲気はなくなりました。

七点句 隣国の近さ知りたる黄砂かな 千恵

康敏さん・・・今年の黄砂の飛来は例年になく北日本にも及んだ。地球温暖化により益々深刻な問題になると予想される。

からみ合う葉を剥がさんと春キャベツ 千恵  
 五郎太さん・・・ロールキャベツでも作るのでしょうか。この季節は葉がまだ薄いようです。ただしげさん・・・春キャベツを一枚ずつ剥がそうとする様子を面白く表現している。  
 堂哉さん・・・買って来たばかりの時は正にエイエイと剥がしますね。面白い句。

盛雄さん・・・柔らかくて美味しい春キャベツ。日常の一時を詠まれた佳作です。

#### 鎌倉寿福寺にて

轉りや実朝のゐて虚子のゐて

康敏

孤舟さん・・・俳句・短歌の世界では実朝と虚子が鎌倉の顔である。

百合子さん・・・遠い時代にまで遡る想い、スケールの大きさに歴史上の人物の体温を感じました。

残雪や靴紐しかと八ヶ岳

びん

孤舟さん・・・春の八ヶ岳では遭難事故多し。周到的な準備が不可欠。

國男さん・・・残雪の八ヶ岳に挑戦。気を引き締めていざ出発！作者の意気込みが伝わってくる。「安全に」と応えたい。

堂哉さん・・・さあ登るぞ！八ヶ岳の勇姿が見えてきます。

天牛さん・・・雪の残る八ヶ岳に上る心がまえが「靴紐しかと」でよく表現出来ていますね。

#### 六点句

桜守いとしむやうに幹に手を

とみ子

允章さん・・・年老いた桜守の長年にわたり世話してきた老木の桜への愛情。

盛雄さん・・・句友の一人が宝塚市の桜守を長年ボランティアしており、山間の桜の大樹の周辺の下草刈り、掃除、見守りなど二十数名の仲間と汗を流しております。中七の「いとしむやうに」が効いていて桜守の心情が伝わってきます。幹に手を「いいですな、樹木医のごとしです。

風光る白き産着の一系列に

とみ子

國男さん・・・産院の光景だと思ふ。新しい命の誕生に対する作者の感動が「風光る」に表現されている。何着かの産着を風が明るく吹き渡っている。

ジョーカーは手のうちにあり春の雷

康敏

五郎太さん・・・ババ抜きかたまたまポーカーか、心がちよつと揺れる。季語がよく効いている。

恵洲さん・・・手の内のジョーカーで何か仕掛けてやろうという、少し悪意もある企みに春雷がよく合います。

亜也さん・・・連句なら「不敵な思ひついほくそ笑む」とでも付けたくなるところ。

見晴るかす花曼茶羅や吉野山

昇

千恵さん・・・桜の季節の吉野山へ是非とも足を運びたくなるような気分させていただきました。

#### 五点句

群青の瀉になだるる花吹雪

くにお

孤舟さん・・・サロマ湖周辺の景か。「なだるる」でスケールの大きい句となった。

恵洲さん・・・群青とピンク、見事な色彩感をシャッターに捉えたような一句。

康敏さん・・・ウルトラマリンと桜の色合いが美しい。

参考「ちるさくら海あをければ海にちる 高屋窓秋」

リハビリは玻璃越しの花眺めつつ

千恵

盛雄さん・・・辛く厳しいリハビリの最中、窓越しに桜を愛でる俳人の姿が十分に浮かんで来ます。

春の雷何処かでテロの匂ひして

正明

孤舟さん・・・春雷の轟音は、岸田首相襲撃の際の弾薬破裂音に通じる。

允章さん・・・雷からテロを発想するのはユニークである。

亜也さん・・・時節柄不謹慎と紙一重ながら、不思議な魅力あり。

藤垂れて万葉句ふ奈良に入る

盛雄

孤舟さん・・・今頃の奈良は将に藤が満開で香っており、万葉時代の息吹も感じられる。  
千恵さん・・・神秘的な雰囲気を持つ古都・奈良を訪れて深呼吸したくなるような幸せな気分が詠まれていると思います。  
龍平さん・・・奈良には偶に行くのが良いのかな 大和の心が住むと言う。

#### 四点句

制服をすこし着崩し入学す

孤舟

恵洲さん・・・新入生のくせに少し悪ぶって、背伸びしている子供の姿が微笑ましい。  
正明さん・・・背広より詰襟の方が好きです。爪を外して入学したのはつい最近のような気がします。

間違い電話あとの無聊や暮るる春

恵洲

堂哉さん・・・折角の電話なのに！間違いとは。こちらから誰かの声を久しぶりに聞こうかな？  
三代でトランプ遊び春夕べ

ゆたか

とみ子さん・・・子供の頃を 懐かしく思い出します。  
千恵さん・・・何かの行事で3世代が集まりトランプに興じている子供たちの様子がほほえましいです。

隆さん・・・平和の尊さが見える。

夜桜や炎と見たり吾妻橋

啓子

龍平さん・・・大学一年生春 私はボート部入り 隅田川は不潔だったが今なお強い印象が。  
吾妻橋風情思いだします。幸せです。

允章さん・・・吾妻橋から見た夜桜の景。

棄て置きし球根芽吹く命あり

啓子

堂哉さん・・・実感です。

八十の見果てぬ夢や春惜しむ

けい子

白鸚の最後のランマンチャの男を見た友から感激のメール

とみ子さん・・・白鸚さんの洋物の舞台姿が目には浮かびます。  
ただしげさん・・・白鷗の「ランマンチャの男」の上演回数一三三四回（五四年間）を上手に賛辞している。

堂哉さん・・・久しぶりに彼の熱唱を聴きたくなりました。YouTubeで探します

鮎子の釘煮小ぶりの荷で届く

天牛

健介さん・・・昔はこの資源があり余ったから釘煮にもしましたが、今や希少、大切にしたい。  
盛雄さん・・・今年も鮎子は不漁でした。瀬戸内の海は汚れが少なくなつて餌のプランクトンが減ったのが原因とか。小ぶりの荷が微笑ましい一句。

#### 三点句

風光る大棧橋にクルーズ船

そらお

孤舟さん・・・風光る観光シーズンを迎え、外国観光客を乗せた大型クルーズ船が続々と寄港する。

康敏さん・・・クルーズ船の運航が三年振りに世界的に再開された。若干の不安は否めない

が、春の陽光下の豪華船は輝いている。

先生と別れの季節桜散る

忠彦

孤舟さん・・・卒業とともに大好きだった先生と別れるのは辛い。  
ただしげさん・・・惜別の寂しさを「桜散る」にかけて上手く表現している。

隆さん……毎年繰り返される光景。ご恩は忘れません。

AIに俳句作らす四月馬鹿

忠彦

三恵さん……二度面白さを味わいました。①AIに俳句を！ ②ああ、エイプリルフルか。本当は、こんなこと「馬鹿げてる」っていう意味も含まれてるのでしょいか。

隠沼に魑魅魍魎の蝌蚪の紐

孤舟

昇さん……上五中七の措辞は蝌蚪の紐の不気味さをよく表現しています。魑魅魍魎とは言い得て妙。未だにこの漢字はスラスラ書けません。

藤の花棚に咲き満つ女学院

五郎太

恵洲さん……満開の藤棚に、乙女の園ともよぶべき女学校の華やぎがよくマッチしています。

広島

楠若葉壊れし姿変えぬまま

五郎太

隆さん……昭和天皇は和平を求めて4月5日組閣を命じた。終戦は原爆後8月15日。「壊れし姿」は建物だけでない。

散りゆくを少しく待てと春の雨

千恵

百合子さん……はらはらと青空の下散りゆく桜花に「おい、少し待てよ」と惜しむ雨の気持に共感、作者にはそんな意図はないのですが、男女の別れの光景にも重なるような……

春眠や身の隈ぐまに睡魔棲む

百合子

啓子さん……春の眠気はけだるいような身体全体からくるもののように。//身の隈ぐまに”睡魔が棲むとは言い得て妙、というものと感心しました。

二点句

賑わいの戻りし春の中華街

そらお

天牛さん……「賑わいが戻る」だけで中華街の原色の明るさまで伝わって来ます。

髪型はいづれも螺髪つくづくし

孤舟

康敏さん……小さな土筆の頭部を如来像の螺髪とみた着想は素晴らしい。

國男さん……土筆の茎頂の筆状の穂がどれもこれも仏様の螺髪（らはつ・らはつ）に似ているという作者の発見の一句。

葉桜の陸軍墓地に香のぼる

五郎太

隆さん……兵士はいつの代も若年なり。その墓地は傷ましい。「花過ぎし陸軍墓地の若人ら」でも。

百合子さん……どなたの慰霊なのでしょう。桜花散り葉桜になった墓地で戦没者を慰霊する香がゆらゆらとのぼる中、葉桜と戦没者の姿が重なり、祈りを捧げる人の静かな想いが伝わってきました。

絶景や三門楼上春惜しむ

健介

ただしげさん……石川五右衛門ならずともこのような良い気分と思われる。

允章さん……京都南禅寺の三門楼上からの眺めは素晴らしい。

醍醐寺の栄華を偲ぶ花見かな

ただしげ

允章さん……秀吉の観桜会は有名だが私も二度ほど行ったことがある。

指先で廻すピザ生地花の昼

康敏

天牛さん……こんな風景もだんだん少なくなりました。美味しいピザでしょう。

春場所や四股八年の初賜杯

堂哉

國男さん……関脇霧馬山の初優勝。毎日、四股を踏み、鉄砲に励んだ8年間の努力が実を結

んだ。大関、横綱への期待が高まる。

散歩する子犬も花を仰ぎ見る

ゆたか

隆さん・・・散歩中の犬の顔が人の顔に見えるとき。

春雨も寒きを思う老いさびし

雅夫

ただしげさん・・・雨が降り、気温が下がると、このような気分になりがちで、納得。

摘む毎に思い出浮かぶクローバー

國護

孤舟さん・・・幼い頃、好きな子と一緒に、幸運をもたらすという四つ葉のクローバーを懸命に探したものだ。

奥山に住みなす村の遅桜

びん

ただしげさん・・・奥山にもようやく桜が咲き春を告げる。ほのぼのとした気持ちになる。

仰ぐほど高き涅槃図猫も居り

亜也

康敏さん・・・京都東福寺の涅槃図が、五年を掛けて修復され、今年の涅槃会に公開された。高さ十米を超える大涅槃図で、珍しく猫が居る。

老いらくの遍路を誘ふ道後の湯

盛雄

孤舟さん・・・四国第五十一番札所「石手寺」の参拝を終え、道後温泉本館の湯船で一日の疲れを癒す。

飛花落花青葉会との点と線

盛雄

龍平さん・・・ウーム 上手いですね。

昔 [Falling sakura, Staying one too, Falling later] なんて作ってみました。元の句を知らない方は、おられませぬ。

亜也さん・・・乾いた措辞の背後にあるさまざまなお思い。

## 一点句

小さきけど花萼群れて美しき

忠彦

天牛さん・・・我が家にも花萼が満開です。いい景です。

※康敏さん・・・小さくて群生し美しい―季語の説明です。これらの要素は季語「花萼」に含まれています。季語の力を信用し、季語を修飾しないこと。

参考「花萼の並び伏したる雨上がり 深見けん二」

春の日を舞ひ納めし神の島

五郎太

五郎太さん(自句自解)・・・中七が字足らずでした。神として祀られる宮島の厳島神社で、長い一日の最後(切り)の能たる猩々(ショウジョウ)のシテを演じました。習っている先生が神社との関係が深く、与えられた春の奉能の機会です。初めて面と能装束をつけ、プロの能楽師の囃子や地謡の中でなんとか演じ終えました。一時強かった風雨もおさまっていました。

春の日を舞ひ収めたり神の島 五郎太

※出句の中七を直し、記録に留めさせてください。

門柱は八重やまぶきに占拠され

千恵

とみ子さん・・・やまぶきに、占拠されと、言いながら 楽しんでおられるご様子ですね。

佐保姫の流す涙か今朝の雨

ただしげ

※五郎太さん・・・今年の桜は早く、しかも雨に打たれた。春の女神佐保姫の涙「か」より涙「や」の方がしっとりするのでは？

※佐保姫が季語。ご存知の方も多いと思いますが簡単に解説。奈良の東にある佐保山、佐保川の女神で、春の野山の造化を司るといわれ、秋の女神である竜田姫はこれに対する。

鶯の鳴く音目覚まし時計かな

ゆたか

千恵さん・・・最近朝ちようど起きようかと思っていたところに鶯の鳴く声を聞きました。  
きつと良い一日の始まりを感じられたのではないのでしょうか。

ゴザ敷いて急遽一席花見酒

國護

天牛さん・・・「ゴザ」がきていますね。ビニールでないのがいいです。

お堀にはタワーの影や花筏

びん

國男さん・・・皇居の濠に東京タワーが映っているのに作者は大いに驚いたのである。小生もかつて、東京駅南口に近い馬場先門の濠に夜の東京タワーの影に気付いたことがあった。

人あふれ都踊りの祇園かな

けい子

隆さん・・・足下を照らしてくれて二階席へ。先斗町の鴨川をどりが懐かしい。



## 【次回青葉会予定】

※分かりにくいと感じる方は遠慮なく、メール・TEL080-8870-8201 星田までお問い合わせください！

◇令和五年五月二十五日(木) 恒例となっている一年に一度の**吟行を催行**します。

参加者は全5句の出句をお願いしますが、まず当季雑詠2く3句星田までご提出をお願いします。  
致します。

投句の方は、いつもと同じように、2句を星田までお送りください。

※当季雑詠は先にPC入力をして当日配布致します。

◇**投句、当日参加者の雑詠2く3句、の締め切りは 五月二十二日(火) 中**

句会場：午後一時から丸紅ビル4階 カンファレンスルームA6号室

・・・吟行(左記要領をご覧ください)後となります。

※吟行に参加出来ずも句会への参加希望者は句会場にて合流。出句は先に当季雑詠5句全部いただくも良し、吟行参加者と同じように当季雑詠2く3句を先に提出いただき、残り2く3句を吟行のテーマに則った当日作句分も受け付けます。

☆☆☆

吟行催行要領：神田神保町古書店街を中心に散策。

※集合10:00 地下鉄半蔵門線・都営地下鉄新宿線・三田線 「神保町」駅上の

「すずらん通り」入口辺りにご参集ください。(丸紅ご出身者には馴染みのある、  
都道301号線(白山通り)に面した街中華「餃子の三幸園」の脇辺り。  
地下鉄出口A7が最も近い・・・但しこの出口は階段のみ。A6出口が幾分階段は楽ですが、出てからすぐの301号線の信号を渡ってお向かいにお越しいただく必要があります。)

集合後適宜近隣を散策、自由に昼食を摂りつつ作句。

※句会開始13:00：丸紅ビル・4階、カンファレンスルームに集合。



今回は 先に出句いただいたものは当方にて入力し当日配布、4句選句をお願い  
することと致します。

吟行にて作句いただいた句は、以前の方法論にて手書き清記し、当季雑誌と別に  
2句選句いただくという方法を探ることにしたく。但し、吟行参加者が極く少数  
だった場合には選句数の変更も視野にいれます（世話人の今井さんと相談済）

※終了16:30を予定（部屋を明け渡す時間です）



## 青葉会報

一、四月青葉会は、最近続けて使わせていただいている世田谷区の施設にて十名のご参加者でした。  
このところ秀句に恵まれ、参加者はもとより、ご投句と選句の皆さまからもなかなか選句も楽しい  
苦勞をする、とのご感想を頂戴することが多くなりました。句評も楽しみつつ書いて下さっている  
なあと嬉しくなるもの、新たな知識をいただき身の引き締まる思いのするものなど、読みごたえも  
あり、有難いかぎりです。

句会は例により、寄贈の日本酒2本、ビールをお持ちになった方もおいでで、気持ちを集中させ  
て選句した後は少し気楽に、お菓子やおつまみを賞味しつつ披講に移りました。五郎太さんのやわ  
らかな司会で夫々の選句の披講も気楽に進むようになっております。句会ご参加は出来なくとも皆  
さまの真摯なお気持ちを載せたご出句と選句を纏め、結果は孤舟さんとみ子さんに票があつまり、  
次点のような形で、千恵さん、康敏さん、びんさんが、それに続く高得点となりました。

## 二、孤舟選者近詠

どの子にも夢ありしやぼん玉を吹く

三四郎池の畔の春日傘

落柿舎で逢ふ春愁のしぐれかな

涅槃西風村は静かに老いてゆく

雪割草ふるさと捨ててより久し

## 三、「森の座」「きさらぎ句会」関係者近詠はお休みいたします。

令和五年五月十四日発行「青葉会報」

※会報仕上がりが遅くなりましたが、この間の皆さまのご協力に深く感謝致します。